

# 過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福感

—岡山県鏡野町富地域の事例—

野 邊 政 雄\*

(平成24年6月19日受付, 平成24年12月6日受理)

## Happiness of Elderly Women in a Mountain Village in Japan : The Case of Tomi Area of Kagamino Town in Okayama Prefecture

NOBE Masao \*

The purpose of this paper is to explore factors which affect the subjective well-being of elderly women in a mountain village. To gather empirical evidence, a survey of elderly women who were between 65 and 79 years of age was conducted in 2006 in Tomi area of Kagamino Town, Japan. In the present study, data of 104 respondents were analysed. Analysis of the data has revealed the following; ①The healthier elderly women were, the happier they felt. Moreover, the more relationships they had with friends, the happier they felt. Among the factors, health had by far the strongest influence upon the feeling of happiness, and friend relationships had the second strongest influence. ②Kinship and neighbour relationships had negative influence upon the feeling of happiness. ③Elderly women in Tomi area felt less happy than such women in Okayama City.

Key Words: subjective well-being, elderly women, mountain village, social relationships, group participation

### 1 問題の所在

日本人の平均寿命は著しく延び、2011年現在、男性では79.6歳、女性では86.4歳となった。その結果、日本人のライフサイクルは大きく変化した。今日、仕事を退職したり、子供が成人して自立したりした後、10年以上も人生をおくることがごく普通のこととなった。そこで、多くの人々にとって充実した幸福な老後をおくことは切実な願望となっている。こうした状況の中で、アメリカや日本の社会老年学者は幸福で生きがいを実感できる高齢期を実現する条件を解明する研究を展開してきた。

高齢者の幸福感の研究は活動理論の検証をめざしてもともと始められた。活動理論とは、壮年期と同じように活発に活動し続けることが幸福に老いるための条件であるというものである。研究者は社会的活動を独立変数とし、主観的幸福感を従属変数とする分析枠組みの中で、社会的活動を活発におこなうことが高い主観的幸福感と関連性のあることをデータによって検証しようとした。社会的活動は個人が他者とどのくらい社会関係を取り結んでいるかによって測定できるから、社会関係と主観的幸福感との関連性を追究することが中心的な研究テーマであった<sup>1)</sup>。

そうした調査研究で判明したことは、主観的幸福感に影響を及ぼす要因はほぼ一定であり、健康度、社会経済

的地位、社会関係を含めた社会的活動が主要な要因であるということであった。そして、「健康、経済状況、社会関係が豊かであることが幸福な老後をおくのに重要であり、なかでも健康であることが最も重要である」<sup>2)</sup>ということがその結論であった。この結論はあまりに当たり前であったために、主観的幸福感の要因を探究しようとする研究者の意欲がそがれてしまい、この分野の研究はここ10年間ほどあまり盛んでない。しかしながら、未解決の課題が残されており、そうした課題を解決することが求められている。そうした未解決の課題の1つが、都市度は主観的幸福感とどのように関連しているかということである。従来の研究の多くでは、主観的幸福感に影響を及ぼす個人の属性や保有する社会関係を探求してきた。これに対し、都市度の異なる地域に居住することによって、高齢者は主観的幸福感で差異があるかどうかを解明することがその課題である。つまり、都市に居住する高齢者と農山村に居住する高齢者とでは、どちらの主観的幸福感が高いかということである。

野邊<sup>3)</sup>は、地方中核都市の岡山市で高齢女性の調査をかつて実施した。この調査と同じ質問を用いて、岡山県の過疎山村である鏡野町富地域(旧、富村)で高齢女性に調査を実施した。本稿では、都市に居住する高齢女性と比較しながら、山村に居住する高齢者の主観的幸福感を

\* 岡山大学 (Okayama University)

説明する。具体的には、次の3点の説明をおこなう。第1に、富地域と岡山市のデータを比較することによって、過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福度は都市に住む高齢女性よりも高いかどうかを明らかにする。第2に、富地域と岡山市の高齢女性の間主観的幸福度で差異があるとき、なぜ都市度の違いによってそうした差異があるかを探索する。第3に、富地域に住む高齢女性のデータを分析することにより、過疎山村に住む高齢女性の主観的幸福度に影響を及ぼす要因を明らかにする。

上野<sup>(4)</sup>が女縁というように、女性は男性よりも社会関係を取り結びやすいから、高齢女性は高齢男性よりも多様なパーソナル・ネットワークを保有していると考えられる。そこで、高齢女性を調査対象者にした方が、社会関係が主観的幸福度に及ぼす効果を検証しやすいと予想される。調査資金の制約があったので、高齢女性を調査対象者にすることにした<sup>(注1)</sup>。

## 2 仮説の提起

先行研究で、主観的幸福度に影響を及ぼす主要な要因は健康度、社会経済的地位、社会関係によって測定される社会的活動であることが明らかにされている。これらの要因のうち、社会的活動は最も操作しやすいから、研究者はこれまで多大な関心を社会的活動に寄せてきた。そして、高齢者が豊富な社会関係を持つことは主観的幸福度を高めるという結果を得ている。しかし、主観的幸福度に影響を及ぼす社会関係は、調査によって相違していた。例えば、配偶者がいること<sup>(5)(6)</sup>、同居者がいること<sup>(2)</sup><sup>(5)</sup>、同居家族関係<sup>(3)(7)</sup>、親族関係<sup>(8)</sup>、近隣関係<sup>(7)</sup>、友人関係<sup>(3)</sup><sup>(5)(7)(8)</sup>の多いこと、社会関係の総体<sup>(1)</sup>が多いこと、社会的に統合されていること<sup>(9)(10)</sup>というように、主観的幸福度を高める社会関係の種類は調査ごとに異なっていた。

日本の先行研究では、健康度、社会経済的地位、社会関係以外に、年齢<sup>(11)(12)(13)</sup>と就業の有無<sup>(14)</sup>が主観的幸福度に影響を及ぼす要因であることが報告されている。そして、年齢が低いほど高齢者は主観的幸福度が高く、就業している高齢者は無職の高齢者よりも主観的幸福度が高いという結果であった。これは、次のように解釈できる。年齢が低い高齢者は先の人生がまだ長く、人生を楽観的・肯定的にとらえることができるから、主観的幸福度が高い。また、仕事をしていると生き甲斐を持てるから、就業している高齢者は無職の高齢者よりも主観的幸福度が高い。

ところで、高齢者は社会的活動をインフォーマルな社会関係を取り結ぶ相手とおこなうだけでなく、フォーマルな集団の中でおこなう。そこで、高齢女性の集団加入と主観的幸福度との関連についても研究されている。集団は「自動加入型」集団と「自主加入型」集団という2つの類型に分けることができる。前者は町内会、婦人会、

老人クラブ（老人会）などのように、ある地域に住んでいる一定の属性を満たす世帯や人は加入することが期待されている（場合によっては、加入が強制的である）集団であるのに対し、後者は自らの興味や関心を実現するために自発的に加入する集団である。このことから、鈴木<sup>(15)</sup>は前者が帰属主義的であり、後者が業績主義的であるといっている。野邊<sup>(3)(7)</sup>は、「趣味の会・スポーツ団体」や「宗教集団」といった自主加入型集団に加入する高齢女性は主観的幸福度が高いことを明らかにした。自主加入型集団に加入する高齢女性はその集団の中で他の人々と一緒に活動して自分の興味を満足させたり、関心を充たしたりすることができるから、そうした女性の主観的幸福度が高かったと解釈できる。

坂野と東海林<sup>(16)</sup>は日本全国20の地方自治体で実施された調査データを分析した。それによれば、主観的幸福度を構成する1因子である社会的幸福感（社会的次元の欲求が満たされている状態）は都市度（都市圏人口規模）と関連があり、都市度が高い地域に居住する高齢者ほど社会的幸福感は高かった。そして、都市度が社会的幸福感に及ぼす効果は、男性よりも女性の方が大きかった。都市では生活における多面的な機会（住む、働く、学ぶ、遊ぶなど）が集積している。彼らの解釈によれば、都市度の高い地域に住む高齢者の社会的幸福感が高かったのは、機会の集積が大きい地域ほど高齢者が社会関係を形成して社会的活動をおこなえるからであるという。

高齢者の社会的幸福感が都市度の相違する地域の間で差異があるとすれば、やはり高齢者の主観的幸福度もそうした地域の間で差異があるということになる。そこで、坂野と東海林の所説を次のように言い換えることができる。高齢者がおこなうことのできる社会的活動は都市度の異なる地域の間で差異があり、都市度の高い地域の高齢者は都市度の低い地域の高齢者よりも社会関係を形成して社会的活動を活発におこなうことができる。そのために、都市度の違う地域の間で高齢者の主観的幸福度は差があり、都市度の高い地域に居住する高齢者の方が都市度の低い地域に住む高齢者よりも高い。坂野と東海林の議論をこのように敷衍することから、都市度と主観的幸福度との関連性について次の仮説を提起できる。

（仮説1）都市度の高い地域に住む高齢女性は、都市度の低い地域に住む高齢者よりも社会的活動をおこなえることから主観的幸福度が高い。

また、その他の先行研究の結果から、富地域に居住する高齢女性の主観的幸福度を規定する要因について次の仮説を提起できる。

（仮説2）健康度、社会経済的地位、社会関係が高齢者の主観的幸福度に影響を及ぼす主要な要因である。そして、健康で、高い社会経済的地位の、多くの社会関係を取り結んでいる高齢女性は、高い主観的幸福度を持つ

ている。

(仮説3) 主観的幸福感に影響を及ぼす要因の中で、健康度が最も重要な要因である。

(仮説4) 年齢が低いほど、高齢女性の主観的幸福感が高い。また、就業している高齢女性は無職の高齢女性よりも主観的幸福感が高い。

(仮説5) 自主加入型集団に加入している高齢女性の主観的幸福感が高い。

### 3 調査の概要

#### (1) 富地域での調査

鏡野町富地域は、岡山県の北部にあり、苫田郡の西端に位置する。富地域は東西約11.5キロ、南北約11キロあり、面積は76.13平方キロである。近くにある比較的大きな都市は津山市(内陸の中心都市であり、平成の大合併前の人口は約9万人)であり、富地域から南東約18キロのところにある。1889年の市制町村制によって行政村としての富村は成立したが、2005年3月に周辺の町村と合併し、鏡野町の一部となった。2005年現在、富地域の人口は778人、世帯数は288戸である。65歳以上の高齢人口の割合は38.8%である(国勢調査による)。

住民基本台帳によれば、2006年1月現在65歳以上80歳未満の女性は富地域に125人いたが、その高齢女性すべてを調査することにした。2006年2月に民生委員が該当する高齢女性を訪問し、面接調査をした。有効票数は104であり、無効票数は21であった。回答者の家族構成は単身世帯18.3%、夫婦のみの世帯32.7%であり、回答者の平均年齢は73.6歳(標準偏差、3.6)である。

富地域の特徴として指摘しておきたいことは、移動が不便であることである。バスだけが富地域とその外とを結ぶ公共交通機関であるが、その便数は少ない。調査当時、富地域の東側にある鏡野町役場富支所(富地域の中心地)と津山駅の間に1往復、富支所と勝山駅の間に1往復、富地域の西側にある集落と勝山駅との間に1往復、バスの便が1日にあるだけであった。町役場は富支所(福祉施設や診療所がその近くにある)と富地域内の集落を結ぶ循環バスを週に2回運行していた。バスの便数が少ないうえに、大部分の富地域の高齢女性は自動車を運転できないから、富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性ほど自由に移動できるわけではない。富地域の高齢女性が自宅や近隣地域にいる時間は自ずと長い。

#### (2) 岡山市での調査

無作為抽出した60歳以上80歳未満の女性に対し、1995年に調査を実施した。富地域の調査の回答者と年齢を一致させるために、標本のうち60歳以上65歳未満の高齢女性を除いた。65歳以上80歳未満の標本のうち3名が収入を回答しなかったため、この3名も除外した。そこで、

本研究で分析する65歳以上80歳未満の高齢女性の標本数は166である<sup>(注2)</sup>。標本の家族構成は単身世帯19.3%、夫婦のみの世帯36.1%であり、標本の平均年齢は70.4歳(標準偏差、4.1)である。

#### (3) 調査方法

独立変数は次のようである。仮説1で、健康度、社会経済的地位、社会関係を独立変数として取り上げた。これらは、次のように測定した。まず、健康度は、4(健康)から1(健康でない)までの4段階で、回答者が自己評価したものである。次に、社会経済的地位として学歴、職業、収入といった指標があるが、先行研究では学歴<sup>(11)</sup>と収入<sup>(2)(8)(9)(12)</sup>が主観的幸福感に影響を及ぼすという結果が報告されている。多くの先行研究が収入を用いているので、本研究でも収入を独立変数とする。収入は、夫婦(夫がいない場合は、本人のみ)の年収である<sup>(注3)</sup>。

個人の取り結ぶ社会関係数を測定するため、①回答者が入院した場合の世話、②2~3万円の借金、③仕事上の話や相談、④心配事の相談、⑤失望や落胆をしているときの慰め、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手、⑧交遊、といった8つの日常生活の状況で、サポートを仰いだり、交際をしたりする相手の名前を尋ねた。①から⑦までの質問についてはサポートを入手できる可能性にもとづいて、⑧だけは交遊したという事実にもとづいて名前をあげてもらった。また、①から⑤までの質問では同居する家族構成員を含めて相手の名前をあげてもらい、⑥から⑧までの質問では、同居する家族構成員を除いて相手の名前をあげてもらった。それと、③の質問は就業している回答者にのみ尋ねた。回答者が8つの質問で相手の名前をあげたとき、回答者はその相手と社会関係を取り結んでいるとする。回答者が8つの質問で同一の人を何回もあげることがあるが、そうした相手は1人と数える。こうしてあげられた相手が、①同居家族、②(家族外の)親族、③近隣者、④友人、⑤職場仲間(上司や同僚)のいずれの間柄かを回答者に尋ねた。それぞれの間柄に該当する相手の人数を計算して、同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数、職場仲間関係数を求めた。

古谷野ら<sup>(5)</sup>と横山ら<sup>(17)</sup>は、ソーシャル・サポートを手段的サポート、情緒的サポート、同伴行動の3種類に分けた。これに従って、本調査で用いた社会関係を測定するための質問項目を分類すれば、①回答者が入院した場合の世話、②2~3万円の借金、⑥留守のときの家の世話、⑦些細な物やサービスの入手の4つが手段的サポート、③仕事上の話や相談、④心配事の相談、⑤失望や落胆をしているときの慰めの3つが情緒的サポートにあたる。⑧交遊には同伴行動だけでなく、電話での交際も含まれているが、同伴行動にほぼ該当する。

年齢と就業の有無が高齢女性の主観的幸福感に影響を及ぼす要因であるという仮説を提起したので、これらの要因も独立変数として用いる。就業の有無は、就業している回答者に1を与え、就業していない回答者には0を与えて、ダミー変数にする。回答者が自家用にのみ農業をおこなっているときは、就業していないとした。

主観的幸福感が多面的であるから、従属変数である主観的幸福感の指標として2つの変数を使用した。その1つは「モラル」である。この測定には、ロートン(Lawton)の改訂PGCモラル・スケール(17項目)を用いた<sup>(18)</sup>。これは、「あなたは自分の人生が年をとるにしたがってだんだん悪くなってくると感じますか。」といった17の質問に「はい」か「いいえ」で答えるものである。そして、高いモラルと関連する選択肢を選んだ場合に1を与え、そうでない選択肢を選んだ場合は0を与える。この得点を17の質問について合計してゆくので、値は0から17まで分布する。クロンバッハの $\alpha$ 係数を求めると富地域の回答者で0.765、岡山市の回答者で0.805となるから、この加算尺度には内的一貫性がだいたいあるといえる。もう1つの変数は「生活満足度」であり、回答者が100点満点で自己評価したものである。改訂PGCモラル・スケールは主観的幸福感の感情的側面を主に測定するのに対し、生活満足度はその認知的側面を測っている<sup>(註4)</sup>。モラルと生活満足度との相関係数を計算すると、富地域の回答者で0.377、岡山市の回答者で0.476と比較的高い。

高齢者は社会関係を取り結んでいるだけでなく、さまざまな集団に加入している。集団への加入・非加入が富地域の回答者の主観的幸福感に影響を与えているかどうかを分析する。調査では23の集団に加入しているかどうかを回答者に質問したが、その中には、町内会のように大部分の世帯が加入している集団がある一方、生協のように回答者があまり加入していない集団や回答者がまったく加入していない集団もあった。そうした集団への加入・非加入がモラルや生活満足度に影響を及ぼしているかどうかを分析することはむずかしいから、町内会と加入率が10%以下の集団を分析から除外した。そこで、「社会奉仕やボランティアの会」、「趣味の会・スポーツ団体」、「老人クラブ」、「コミュニティ協議会」、「農協」の5つの集団だけを取り上げる。「社会奉仕やボランティアの会」と「趣味の会・スポーツ団体」は自主加入型集団に、「老人クラブ」、「コミュニティ協議会」、「農協」は自動加入型集団に分類できる。

## 4 結果

### (1) 主観的幸福感と要因の比較

まず、富地域と岡山市に居住する回答者の主観的幸福感を比較する。モラルの平均は富地域の高齢女性が9.54(標準偏差, 3.56)、岡山市の高齢女性が11.86(標準偏

差, 3.62)である。平均値の差の検定をおこなう(両側検定)と両者の間に有意差があり、岡山市の高齢女性の方が富地域の高齢女性よりも高い。生活満足度は富地域の高齢女性が70.56(標準偏差, 15.31)、岡山市の高齢女性が75.46(標準偏差, 14.51)である。平均値の差の検定をおこなう(両側検定)と両者の間にやはり有意差があり、岡山市の高齢女性の方が富地域の高齢女性よりも高い。

主観的幸福感に影響を及ぼす要因は富地域の回答者と岡山市の回答者の間でどのような違いがあるかを比較する。これらの要因の平均値を富地域と岡山市の回答者ごとに集計し、表1に示す。収入と年齢は両群の間で有意差がある。収入は岡山市の回答者の方が富地域の回答者よりも多い。そして、年齢は富地域の回答者の方が岡山市の回答者よりも高い。パーソナル・ネットワークの規模(=各種の社会関係の合計)でも有意差があり、富地域の回答者は岡山市の回答者よりも規模の大きいパーソナル・ネットワークを保有している。各種の社会関係数を見ると、親族関係数、近隣関係数、友人関係数で有意差がある。そして、岡山市の回答者は富地域の回答者よりも多くの友人関係を取り結んでいるのに対し、後者は前者よりも多くの親族関係と近隣関係を保持している。後者のパーソナル・ネットワークの規模は、前者のそれよりも大きい。

### (2) 主観的幸福感を規定する要因

富地域の回答者について、主観的幸福感を従属変数とする重回帰分析をおこなう。独立変数は、健康度、収入、年齢、就業の有無、同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数、職場仲間関係数の9つである。そして、従属変数はモラルと生活満足度の2つである。これら11の変数の平均と標準偏差は表1の左側に示してある。同表から、回答者は職場仲間関係をほとんど保有しておらず、職場仲間関係数は正規分布をしていないことが分かる。そこで、職場仲間関係数は独立変数として用いないことにする。結局、健康度、収入、就業の有無、年齢、同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数の8つの変数を独立変数とし、モラルと生活満足度それぞれを従属変数とするモデルで重回帰分析をおこなうことにする。社会関係数がモラルに影響を及ぼしているかどうかを検証するために、独立変数の投入は2段階に分けておこない、第1段階で健康度、収入、年齢、就業の有無を、第2段階で同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数を更に投入する。

表2は、富地域の回答者の重回帰分析で用いる8つの独立変数間の相関係数を示している。この表で、相関係数が0.15以上である変数間の関連を指摘する。まず、健康度は年齢および近隣関係数との間に関連があり、年齢の低い回答者ほど健康であり、健康な回答者ほど多くの近隣

表1 富地域と岡山市の回答者の比較

	富地域の回答者 104人			岡山市の回答者 166人	
	平均	標準偏差		平均	標準偏差
(独立変数)					
健康度	3.31	0.56		3.42	0.61
収入	185.12	113.01	<<	321.28	232.32
年齢	73.64	3.64	>>	70.43	4.05
就業の有無(就業:1, 無職:0)	0.32	0.47		0.24	
同居家族関係数	0.91	0.86		0.84	0.91
親族関係数	2.69	1.80	>>	2.22	1.83
近隣関係数	2.19	2.11	>>	0.86	1.22
友人関係数	0.77	1.58	<<	1.51	2.15
職場仲間関係数	0.06	0.59		0.18	0.74
パーソナル・ネットワークの規模	6.62	2.92	>>	5.61	3.42
(従属変数)					
モラール	9.54	3.56	<<	11.86	3.62
生活満足度	70.56	15.31	<<	75.46	14.51

(注) 平均値の差の検定をおこなった。就業の有無については、 $\chi^2$ 検定をおこなった。  
 <<あるいは>>  $p < .01$ で有意差がある(両側検定)

表2 独立変数間の相関係数(富地域の回答者)

	収入	年齢	就業の有無	同居家族 関係数	親族関係数	近隣関係数	友人関係数
健康度	0.122	-0.227	0.143	-0.085	-0.079	0.164	0.070
収入		-0.213	0.194	0.051	0.096	-0.032	0.143
年齢			-0.110	-0.035	0.037	-0.143	0.189
就業の有無(就業:1, 無職:0)				0.262	0.013	-0.112	0.192
同居家族関係数					-0.231	-0.012	-0.122
親族関係数						-0.110	0.033
近隣関係数							-0.153

関係を取り結んでいる傾向があった。次に、収入は就業の有無および年齢との間に関連があり、就業している回答者は収入が高く、年齢が低い回答者ほど収入が高い傾向があった。それから、就業の有無は同居家族関係数および友人関係数との間に関連があり、就業している回答者は多くの同居家族関係や友人関係を取り結んでいる傾向があった。年齢は友人関係数との間に関連があり、年齢の低い回答者ほど多くの友人関係を取り結んでいる傾

向があった。同居家族関係数は親族関係数との間に関連があり、多くの同居家族関係を保有する回答者ほど親族関係が少ない傾向があった。近隣関係数は友人関係数との間に関連があり、多くの近隣関係を保有する回答者ほど友人関係が少ない傾向があった。

モラールを従属変数にして重回帰分析をおこなった結果は、表3の通りである。第1段階の決定係数は0.129で、第2段階では0.165であるので、この間の決定係数の増加

表3 モラールを従属変数とした重回帰分析(富地域の回答者)

	モデル I		モデル II	
	標準偏帰係数	相関係数	標準偏帰係数	相関係数
健康度	0.280	0.316	0.281	0.316
収入	0.021	0.083	0.011	0.083
年齢	-0.170	-0.234	-0.143	-0.234
就業の有無(就業:1, 無職:0)	-0.038	0.025	-0.074	0.025
同居家族関係数			0.012	-0.035
親族関係数			-0.056	-0.077
近隣関係数			-0.029	0.024
友人関係数			0.184	0.219
$R^2$	0.129		0.165	
$\Delta R^2$			0.036	

表4 生活満足度を従属変数とした重回帰分析（富地域の回答者）

	モデルⅠ		モデルⅡ	
	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数
健康度	0.248	0.278	0.277	0.278
収入	0.139	0.182	0.127	0.182
年齢	-0.060	-0.146	-0.036	-0.146
就業の有無(就業:1, 無職:0)	0.010	0.070	-0.085	0.070
同居家族関係数			0.157	0.116
親族関係数			-0.081	-0.112
近隣関係数			-0.102	-0.067
友人関係数			0.185	0.207
$R^2$	0.103		0.172	
$\Delta R^2$			0.069	

表5 モラールを従属変数とした重回帰分析（岡山市の回答者）

	モデルⅠ		モデルⅡ	
	標準偏回帰係数	相関係数	標準偏回帰係数	相関係数
健康度	0.311 **	0.316 **	0.319 **	0.316 **
収入	0.054	0.055	0.027	0.055
年齢	-0.001	-0.057	-0.015	-0.057
就業の有無(就業:1, 無職:0)	0.032	0.089	0.003	0.089
同居家族関係数			0.168 *	0.157 *
親族関係数			0.031	0.069
近隣関係数			-0.015	-0.024
友人関係数			0.107	0.087
$R^2$	0.104		0.141	
$\Delta R^2$			0.037 **	

(注)\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

は0.036である。そこで、社会関係数はモラールに影響を及ぼしていることになる。第2段階の分析結果によれば、健康度と友人関係数の標準偏回帰係数の絶対値が1.5以上と大きく、これらの要因がモラールに影響を及ぼしている。また、年齢の標準偏回帰係数は0.143であり、この要因もモラールにある程度の影響を与えている。標準偏回帰係数の符号から、健康であるほど、年齢が低いほど、友人関係が多いほど、回答者は高いモラールを持っていることが分かる。

表4は、生活満足度を従属変数にして、重回帰分析をおこなった結果を示している。第1段階の決定係数は0.103で、第2段階では0.172であるので、第1段階と第2段階の間の決定係数の増加は0.069である。そこで、社会関係数はモラールに影響を及ぼしていることになる。第2段階の分析結果によれば、健康度、同居家族関係数、友人関係数の標準偏回帰係数の絶対値が1.5以上であり、これらの要因が生活満足度に影響を及ぼしている。また、収入と近隣関係数の標準偏回帰係数の絶対値は0.1以上0.15未満であり、これらの要因も生活満足度にある程度の影響を与えている。標準偏回帰係数の符号から、健康であるほど、収入が多いほど、同居家族関係が多いほど、近隣関係が少ないほど、友人関係が多いほど、回答者は

生活満足度が高いことが分かる。

生活満足度を従属変数とした分析で、親族関係数と近隣関係数の標準偏回帰係数の符号が負であることに注目しておきたい<sup>(注5)</sup>。これは親族関係や近隣関係が多いほど生活満足度が低いということである。ところで、モラールを従属変数とした分析でも、親族関係数の標準偏回帰係数の符号はやはり負であり、親族関係が多いほどモラールが低い。ただし、標準偏回帰係数の絶対値は小さいから、親族関係数がモラールに及ぼす影響は小さい。

岡山市の回答者についても、主観的幸福感を従属変数とする重回帰分析をおこなう。モラールを重回帰分析にして重回帰分析をおこなった結果は、表5の通りである。第1段階と第2段階における決定係数の増加は、0.037である。これは有意な増加であるから、社会関係数はモラールに影響を及ぼしていることになる。第2段階の分析によれば、健康度と同居家族関係数がモラールに有意な影響を及ぼしている。標準偏回帰係数の符号から、健康であるほど、同居家族関係数が多いほど、回答者はモラールが高いことが分かる。

表6は、生活満足度を従属変数にして、重回帰分析をおこなった結果を示している。第1段階と第2段階における決定係数の増加は、0.039である。これは有意な増加

表6 生活満足度を従属変数とした重回帰分析（岡山市の回答者）

	モデルⅠ		モデルⅡ	
	標準偏帰係数	相関係数	標準偏帰係数	相関係数
健康度	0.289 **	0.314 **	0.295 **	0.314 **
収入(万円)	0.038	0.057	0.070	0.057
年齢	-0.045	-0.104	-0.063	-0.104
就業の有無(就業:1, 無職:0)	0.115	0.172 *	0.088	0.172 *
同居家族関係数			0.184 *	0.183 **
親族関係数			0.049	0.082
近隣関係数			-0.029	-0.044
友人関係数			0.054	0.047
$R^2$	0.117		0.156	
$\Delta R^2$			0.039 **	

(注)\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表7 集団加入者と非加入者のモラールと生活満足度の平均（富地域の回答者）

		モラール		生活満足度		人数
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
社会奉仕やボランティアの会 (公民館やカルチャー・センターの活動も含む)	加入者	10.42	3.37	71.84	12.82	19
	非加入者	9.34	3.59	70.27	15.87	85
趣味の会・スポーツ団体	加入者	9.92	3.52	72.98	12.81	52
	非加入者	9.15	3.59	68.13	17.25	52
老人クラブ	加入者	9.11	3.49	70.56	13.69	22
	非加入者	10.00	3.61	70.56	17.03	82
コミュニティ協議会	加入者	8.82	3.87	72.18	12.87	24
	非加入者	9.73	3.47	70.12	15.95	80
農協	加入者	9.75	3.44	68.13	14.51	35
	非加入者	9.48	3.62	71.29	15.56	69

であるから、社会関係数は生活満足度に影響を及ぼしているといえる。第2段階の分析によれば、健康度と同居家族関係数が生活満足度に有意な影響を及ぼしている。標準化偏帰係数の符号から、健康であるほど、同居家族関係数が多いほど、回答者は生活満足度が高いことが分かる。

### (3) 集団加入の効果

富地域の回答者を5つの集団それぞれに加入している回答者と加入していない回答者に2分し、両群のモラールと生活満足度の平均を求め、表7に示す。集団加入者のモラールが集団非加入者のそれよりも1以上高かったのは、「社会奉仕とボランティアの会」だけである。また、集団加入者の生活満足度が集団非加入者のそれよりも4以上高かったのは、「趣味の会・スポーツ団体」だけである。

## 5 考察

### (1) 都市度による主観的幸福感の違い

岡山市の高齢女性は富地域の高齢女性よりも主観的幸福感が高かった。これは、仮説1で予想した通りの結果である。高齢女性の主観的幸福感が都市度の異なった地域の間で差異があるとき、高齢女性の属性が相違するこ

とから、あるいは、機会が集積していることで社会的活動をおこなえるかどうかから、その差異は生じる。両地域の間主観的幸福感で差異があった原因を探索するために、主観的幸福感に影響を及ぼす主要な要因を比較する。

まず、健康度である。先行研究によれば、健康度の高い高齢者ほど主観的幸福感が高い。両地域の高齢女性を比較したところ、健康度は両者の間で有意差がなかったから、主観的幸福感で差があった原因とはいえない。次に、社会経済的地位である。先行研究によると、高齢者が高い社会経済的地位を占めているほど、高い主観的幸福感を持っている。岡山市の高齢女性は富地域の高齢女性より収入が高かったが、この高い収入のために岡山市の高齢女性が富地域の高齢女性よりも主観的幸福感が高かった可能性がある。それから、年齢である。先行研究では、年齢が低いほど高齢者の主観的幸福感が高い。年齢は岡山市の高齢女性の方が富地域の高齢女性よりも低かった。そのために、岡山市の高齢女性は富地域の高齢女性よりも主観的幸福感が高かった可能性がある。最後に、パーソナル・ネットワークの規模である。坂野と東海林<sup>(16)</sup>の説明によれば、高齢者は多くの社会関係を形成して社会的活動ができると、高齢者の主観的幸福感が高くなるという。パーソナル・ネットワークの規模は富

地域の高齢女性の方が岡山市の高齢女性よりも大きかった。とすると、彼らの説明にもとづけば、前者は後者よりも主観的幸福感が高いということになる。ところが、後者が前者よりも主観的幸福感が高いという結果であった。この結果は彼らの説明に反しているから、パーソナル・ネットワークの規模の効果が弱かったか、彼らの想定している因果関係が正しくないことになる。

このことを追究するために、重回帰分析の結果を検討する。主観的幸福感を従属変数とする重回帰分析を富地域の高齢女性についておこなったところ、各種の社会関係係数が主観的幸福感に及ぼす影響は次のようであった(表3と表4を参照)。まず、標準偏回帰係数(-0.056)の絶対値は小さいけれど、親族関係数がモラルに負の影響を及ぼしていることである。つまり、それほど効果は大きくないものの、高齢女性は親族関係を多く保有するほど、モラルが低いのである。次に、親族関係数と近隣関係数は生活満足度に負の影響を及ぼしていることである。標準偏回帰係数は、親族関係数が-0.081であり、近隣関係数が-0.102である。このように、標準偏回帰係数の符号は両方とも負であるので、親族関係数や近隣関係数が多いほど、生活満足度が低いことになる(注6)。それから、同居家族関係数と友人関係数はモラルと生活満足度に正の影響を及ぼしていることである。つまり、これらの社会関係を多く保有するほど、高齢女性の主観的幸福感が高い。

富地域の高齢女性のデータと同じように、岡山市の高齢女性のデータを重回帰分析で分析したが、その分析結果は次のようであった(表5と表6を参照)。近隣関係数はモラルと生活満足度に負の影響を及ぼしている。けれども、その標準偏回帰係数の絶対値はほぼ0であるから、近隣関係数はモラルや生活満足度にほとんど影響を及ぼしていない。これに対し、同居家族関係数、親族関係数、友人関係数はモラルと生活満足度に正の影響を及ぼしている。つまり、これらの社会関係を多く保有するほど、高齢女性の主観的幸福感が高い。ただし、統計的に有意であったのは、同居家族関係数だけである。

富地域では親族関係数や近隣関係数は主観的幸福感に負の影響があり、高齢女性が親族関係や近隣関係を多く保有しているほど、主観的幸福感が低かった。これに対し、岡山市では親族関係は主観的幸福感に正の影響があり、高齢女性が親族関係や近隣関係を多く保有しているほど、主観的幸福感が高かった。そして、近隣関係は主観的幸福感にほとんど影響を及ぼしていなかった。親族関係や近隣関係が主観的幸福感に作用する仕方で、富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性と異なっている。この違いは、次のように説明できる。

まず、富地域に居住する高齢女性はあまり自由に移動できないことである。そのため、高齢女性は自ら出かけ

ていって、気心の通じた親族とつき合ってゆくことがむずかしい。次に、山村では、女性が結婚すると夫の両親と同居することが多いから、夫の親族がしばしば近所に居住している。女性はそうした親族と幼いときから一緒に育ったわけではないので、気心が通じているというわけではない。しかし、親族が近所に居住していることから、好むと好まざるとにかかわらず、女性はそうした親族とつき合い、助け合って暮らさざるをえない(19)。例えば、こじゅうとが近所に住んでいて、家庭生活に干渉してくるが、高齢女性はそうした親族とつき合わなければならないといった関係である(注7)。こうした場合、高齢女性は親族関係を多く保有するほど、主観的幸福感が低くなる。

山村において、住民は農業生産における協力を基盤としながら、冠婚葬祭をはじめとする生活のさまざまな側面で近隣者と助け合って暮らしている。そして、そうした助け合いは任意でなく、強制的である。たしかに都市においても、町内会活動のように近隣者と協力しあうことはある。しかし、都市では山村よりも協力しあう側面が限られており、山村ほど協力は強制的ではない。そのために、山村では都市よりも、近隣関係を暮らしてゆくためにやむをえず結び結ぶという性格が強い(19)。この強制的な性格のために、山村では、高齢女性が近隣関係を多く保有するほど、主観的幸福感が低くなると考えられる。

社会関係を保有することは個人にとって有益であると考えられるけれど、頻繁な交際が負担となってしまう、個人に望ましくない効果を及ぼすこともある。そこで、「ネガティブ・サポート」という概念が提唱されている(20)。本研究によれば、山村の親族関係や近隣関係にはネガティブ・サポートの性格があるといえる。

坂野と東海林(16)は、都市度と高齢者の主観的幸福感との関連を次のように説明した。高齢者が多くの社会関係を取り結び、社会的活動を活発におこなうと、主観的幸福感が高くなる。そして、都市では山村よりも機会の集積が大きくて社会関係を取り結びやすいから、高齢者の主観的幸福感が高い。本研究によれば、パーソナル・ネットワークの規模は富地域の高齢女性の方が岡山市の高齢女性よりも大きいにもかかわらず、後者の主観的幸福感の方が前者のそれよりも高かった。この結果は、坂野と東海林の説明に反している。この矛盾は、次のように解説できる。山村である富地域に居住する高齢女性が保有する親族関係と近隣関係にはネガティブ・サポートの性格がある。富地域では岡山市よりも、高齢女性は多くのそうした社会関係を取り結んでいる(表1を参照)。このことは富地域に居住する高齢女性の主観的幸福感を低下させるように働き、その高齢女性の主観的幸福感が岡山市の高齢女性のそれよりも低い一因となっている。

本研究から、坂野と東海林の所説を次のように修正すべきであることも明らかとなった。高齢者が多くの社会関係を取り結ぶことで、主観的幸福感が高くなるわけではない。都市度が異なる地域によって、各種の社会関係が主観的幸福感に作用する仕方は相違している。山村では高齢者は多くの親族関係や近隣関係を取り結んでいるけれど、これらの社会関係にはネガティブ・サポートの性格がある。そのために、山村で親族関係や近隣関係を多く保有するほど、主観的幸福感が低下してしまう。このことは、都市度の低い地域に居住する高齢者の主観的幸福感が都市度の高い地域に居住する高齢者のそれよりも低い一因となる。ところで、主観的幸福感に関する調査はこれまで都市で実施されてきた。そこでは、親族関係や近隣関係を保有することが主観的幸福感を低下させることはなかった。そのために、坂野と東海林は高齢者が多くの社会関係を取り結び社会的活動をおこなうと主観的幸福感が高くなると想定したのであろう。

## (2) 富地域の高齢女性の主観的幸福感(表3と表4を参照)

富地域の高齢女性の主観的幸福感に影響を及ぼす要因について検討する。仮説2は次のようであった。健康度、社会経済的地位、社会関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす主要な要因である。そして、健康で、高い社会経済的地位の、多くの社会関係を取り結んでいる高齢女性は、高い主観的幸福感を持っている。富地域の高齢女性のデータを重回帰分析で分析した結果によれば、モラールを従属変数としたとき、標準偏回帰係数の絶対値が0.1以上であったのは、健康度、年齢、友人関係数であった。そして、健康であるほど、年齢が低いほど、友人関係が多いほど、高齢女性はモラールが高かった。生活満足度を従属変数としたとき、標準偏回帰係数の絶対値が0.1以上であったのは、健康度、収入、同居家族関係数、近隣関係数、友人関係数であった。そして、健康であるほど、社会経済的地位(収入)が高いほど、同居家族関係と友人関係が多いほど、近隣関係が少ないほど、高齢女性の生活満足度は高かった。収入はモラールにあまり影響を与えていなかった。この点は仮説2に背反している。しかし、収入は生活満足度に影響を及ぼしていた。改訂PGCモラール・スケールは主観的幸福感の感情的側面を主に測定しているから、収入の多寡は主観的幸

福感の感情的側面にあまり影響を及ぼさないということである。むしろ、それは、日常生活についての満足感といった主観的幸福感の認知的側面に影響を及ぼしていた。社会経済的地位(収入)以外については、結果は仮説2と整合する。

同居家族関係数はモラールと生活満足度に影響を及ぼしていた。このことを更に追究するために、家族構成の違いが主観的幸福感に影響を及ぼしているかどうかを見る。家族構成を「単身」、「夫婦のみ」、「子供(夫婦)と同居」、「その他」に4分して、モラールと生活満足度の平均値を算出し、表8に示す。同表によれば、家族構成の違いによって、モラールと生活満足度はあまり差異がない。

仮説3は、主観的幸福感に影響を及ぼす要因の中で、健康度が最も重要な要因であるというものであった。標準偏回帰係数の絶対値の大きさは従属変数への影響力の大きさを示している。健康度の標準偏回帰係数の値は、モラールを従属変数としたとき0.281であり、生活満足度を従属変数としたとき0.277であった。いずれの分析でも、健康度の標準偏回帰係数の絶対値は独立変数の中で最も大きいから、健康度はモラールに最も強い影響を及ぼす要因であるということになる。これは仮説と一致しており、健康で自由に行動できることが主観的幸福感を高めるのに最も重要であることを示している。

健康度に次いで大きな影響を及ぼす要因は友人関係数であることにも注目しておきたい。友人関係数の標準偏回帰係数は、モラールを従属変数とした分析で0.184であり、生活満足度を従属変数とした分析で0.185であった。それぞれの分析で、友人関係数の標準偏回帰係数の絶対値は健康度のそれに次いで大きいから、友人関係数の影響力が健康度の次に大きいことになる。

友人関係数が重要であったことは、その特徴から説明できる。親族関係や近隣関係と比べると、友人関係には次のような特徴がある。個人の親族の中から一部の人を選び出して取り結ぶ社会関係が親族関係である。そして、近隣関係というのは、個人が自宅に近い地域に居住する人々の中から一部の人々を選び出して取り結ぶ社会関係である。そこで、親族関係や近隣関係を取り結ぶ相手は限られている。個人は血縁関係にあたり、地理的に近くに居住したりすることを契機として、親族関係や

表8 家族構成別に見るモラールと生活満足度の平均(富地域の高齢女性)

	モラール		生活満足度		人数
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
本人のみ	9.79	3.38	69.37	21.05	19
夫婦のみ	9.68	3.71	71.18	13.03	34
子供(夫婦)と同居	9.20	3.56	70.00	15.69	41
その他	10.00	3.86	73.00	8.23	10

近隣関係を取り結ぶから、その相手と興味や関心を必ずしも共有しているわけではないし、その関係も自発的であるとは限らない。これに対し、個人が遠方に居住している人々の中から自分と同じ興味や関心を持つ人々と知り合い、自らの努力で築き上げた社会関係が友人関係である<sup>(15)</sup>。富地域では岡山市よりも高齢女性は多くの親族関係や近隣関係を取り結んでいるが、そうした社会関係は山村である富地域ではネガティブ・サポートの性格を持っている。それゆえに、友人関係は富地域で幸福感を与える数少ない社会関係としてとても重要であるから、友人関係数が健康度に次いで重要な要因であったと解釈できる。

仮説4は、次のようであった。年齢が低いほど、高齢女性の主観的幸福感は高い。また、就業している高齢女性は無職の高齢女性よりも主観的幸福感が高い。

まず、年齢の効果を検討する。モラルを従属変数とした分析では、年齢の標準偏回帰係数は-0.152であり、年齢は負の影響を及ぼしていた。つまり、年齢が低いほど、高齢女性のモラルは高かった。このことは、仮説に合致している。生活満足度を従属変数とした分析では、年齢の標準偏回帰係数は-0.036と、その絶対値はほとんど0であったので、年齢は生活満足度にほとんど影響を及ぼしていないことになる。このことは、仮説と背馳している。こうして見ると、年齢は主観的幸福感の感情的側面に影響を与えるが、その認知的側面には効果があまりないということになる。年齢が主観的幸福感に作用する仕方は、収入の作用の仕方とは対照的である<sup>(註8)</sup>。

次に、就業の有無が主観的幸福感に及ぼす効果を検討する。就業の有無の標準偏回帰係数は、モラルを従属変数としたとき-0.074であり、生活満足度を従属変数としたとき-0.085であった。標準偏回帰係数の符号が負であることから、高齢女性が就業しているとき、主観的幸福感が低いことになる。これは、仮説に反している。ただし、その絶対値は大きくないことから、就業の有無の効果は小さい。結果が仮説と食い違っていたのは、次のようなことからであると考えられる。就業している高齢者の主観的幸福感が無職の高齢者のそれよりも高いという結果であったのは西下<sup>(14)</sup>の研究においてであったが、その調査対象者は企業に勤務していた大都市の男性であった。これに対し、本研究の調査対象者は山村の高齢女性であった。調査で就業していると回答した高齢女性の多くは、市場に農産物を出荷するくらい本格的に農作業をしていた。楽しみで自家用に農業をしている高齢女性は、無職と回答した。農作業は重労働なので、山村で就業する高齢女性は主観的幸福感が低かったと考えられる。調査対象者が異なることから、就業の有無は先行研究の結果と相違していたと推論できる。

仮説5は、自主加入型集団に加入している高齢女性の

主観的幸福感は高いであった。分析結果は次のようであった。集団加入者が集団非加入者よりもモラルで1以上高かったのは、「社会奉仕やボランティアの会」だけであった。「趣味の会・スポーツ団体」の加入者も非加入者よりもモラルが高かったけれど、差はそれほど大きくなかった。集団加入者が集団非加入者よりも生活満足度で4以上高かったのは、「趣味の会・スポーツ団体」だけであった。これほど差は大きくなかったが、「社会奉仕やボランティアの会」の加入者は非加入者よりも生活満足度が高かった。このように、自主加入型集団である「社会奉仕やボランティアの会」と「趣味の会・スポーツ団体」の加入者は非加入者よりもモラルや生活満足度が高かった。これに対し、自動加入型集団では、集団加入者が集団非加入者よりもモラルおよび生活満足度で必ずしも高いわけではない。例えば、「農協」の加入者は非加入者よりもモラルは高いが、生活満足度は低い。したがって、仮説5は支持される。このことは、自主加入型集団の中で活動することで自らの関心や興味を充足できるから主観的幸福感が高くなることを示唆している。ただし、モラルや生活満足度における差はこれらの集団の加入者と非加入者との間でそれほど大きくはなく、その効果はあまり大きくない。

## 6 結論

本稿の目的は、岡山県の過疎山村である鏡野町富地域に居住する高齢女性の主観的幸福感（モラルと生活満足度）を探究することであった。そのデータを分析するだけでなく、岡山市の高齢女性のデータと比較をおこなった。分析で得られた知見は、次の4点に要約できる。

(1) 富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性よりも主観的幸福感が低い、これは次のようなことからである。まず、前者は後者よりも収入が低いことである。次に、前者は後者よりも年齢が高いことである。加えて、富地域の親族関係や近隣関係にはネガティブ・サポートの性格があることである。そのため、富地域の高齢女性がこれらの社会関係を多く取り結んでいるほど、主観的幸福感が低い。こうしたことから、富地域の高齢女性は岡山市の高齢女性よりも主観的幸福感が低かったと推論できる。

(2) 健康度、年齢、友人関係数が富地域の高齢女性のモラルに影響を及ぼしていた。そして、健康であるほど、年齢が低いほど、友人関係が多いほど、高齢女性はモラルが高かった。また、健康度、収入、同居家族関係数、近隣関係数、友人関係数が富地域の高齢女性の生活満足度に影響を及ぼしていた。そして、健康であるほど、収入が高いほど、同居家族関係と友人関係が多いほど、近隣関係が少ないほど、高齢女性の生活満足度は高かった。

(3) これらの要因の中で、健康度が最も大きな影響を

主観的幸福感に与えていた。健康度の次に、友人関係係数が大きな影響を及ぼしていた。

(4) 富地域で自主加入型集団に加入する高齢女性は加入していない高齢女性よりも主観的幸福感が高かった。しかし、その影響力はあまり大きくなかった。

#### —注—

- 1 性別がモラルに及ぼす効果については、古谷野<sup>(12)</sup>の研究がある。彼は、賃貸住宅団に居住する65歳以上の高齢者のデータを分析した。その分析によると、有配偶であることがモラルに及ぼす影響は男性と女性では異なっていた。配偶者のいることは男性ではモラルを高揚させるのに対し、女性ではモラルを低下させていた。
- 2 岡山市での調査の詳細は、野邊政雄『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶の水書房、2006の167-169頁を参照。
- 3 調査では、回答者に「101万円以上200万円以下」といった選択肢から年収を選んでもらった。相関係数の計算や重回帰分析では、選択肢の中央値を用いた。
- 4 ジョージ(George)<sup>(21)</sup>は主観的幸福感の概念を整理するとき、認知であるか感情であるかという軸が重要であることを指摘している。改訂PGCモラル・スケールは「はい」と「いいえ」で回答する17の質問項目から構成されている。このスケールは、「老いに対する態度」、「孤独感・不満足感」、「心理的動揺」の3つの因子(下位尺度)からなる。「あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。」は「老いに対する態度」、「さびしいと感じることがありますか。」は「孤独感・不満足感」、「心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか。」は「心理的動揺」の代表的な質問項目である。「老いに対する態度」は認知と分類されるのに対し、「孤独感・不満足感」と「心理的動揺」は一過的な感情と分類される<sup>(2)</sup>。したがって、改訂PGCモラル・スケールは主観的幸福感の感情的側面を主に測定しているといえる。ところで、生活満足度は「あなたは毎日の生活に、100点満点でいえば、何点ぐらいの生活満足度をお持ちですか。」という質問で尋ねている。質問文から、これは主観的幸福感の認知的側面を測定しているといえる。
- 5 標準偏回帰係数の値と相関係数の値を比較すると、同居家族関係係数の標準偏回帰係数の値(0.157)は相関係数の値(0.116)を上回っており、抑圧があったことを示している。変数間の相関係数によって、抑圧が起こった原因を探ると、同居家族関係係数と友人関係係数は生活満足度と正の相関関係があるが、同居家族関係係数と友人関係係数との間には負の相関関係がある(-0.122)ことが抑圧の原因と考えられる。同居家族関係と友人関係

が多いと高齢女性の生活満足度が高いが、多くの友人関係を保有する高齢女性は逆に同居家族関係をあまり取り結んでいないということである。このため、同居家族関係係数と生活満足度との相関関係は小さく評価されたから、同居家族関係係数の標準偏回帰係数の値は相関係数の値よりも大きかったと考えられる。

近隣関係係数の標準偏回帰係数の値(-0.102)も相関係数の値(-0.067)も負であるが、前者の絶対値は後者の絶対値を上回っており、ここでも抑圧があったことを示している。近隣関係係数と親族関係係数は生活満足度と負の相関関係があるが、近隣関係係数と親族関係係数との間には負の相関関係がある(-0.110)ことが抑圧の1つの原因と考えられる。近隣関係と親族関係が多いと高齢女性の生活満足度は低いが、多くの親族関係を保有する高齢女性は近隣関係をあまり取り結んでいないということである。また、近隣関係係数と年齢は生活満足度と負の相関関係があるが、近隣関係係数と年齢との間には負の相関関係がある(-0.143)ことが抑圧のもう1つの原因と考えられる。近隣関係が多く、年齢が高いと高齢女性の生活満足度は低いが、年齢が高くなるほど高齢女性は取り結ぶ近隣関係が少なくなるということである。これらの理由のために、近隣関係と生活満足度との相関関係は小さく評価されたから、近隣関係係数の標準偏回帰係数の絶対値は相関係数の絶対値よりも大きかったと考えられる。

- 6 モラルを従属変数として分析すると(表4を参照)、近隣関係係数の標準偏回帰係数はやはり負であるが、その絶対値は0に近く、その影響力はほとんどない。
- 7 富地域以外から富地域に嫁いできた女性には、近所に血縁関係のある親族がいない。そうした女性は近所にいる夫の親族と親族関係を持つことになる。しかし、夫が死亡すると、近所にいる夫の親族と疎遠になる。ある高齢女性は、「地元出身でない(高齢の)女性は夫が亡くなると人間関係が少なくなる」と言っていた。このことは、高齢女性が近所にいる夫の親族とやむをえずつき合っているということがあることを示している。この聞き取り調査は、2006年3月12日に実施した。
- 8 前述したように、主観的幸福感の研究は活動理論を検証することから始まったので、調査対象者を高齢者に限定することが多く、筆者の知る限りでは、中高年者を調査対象とする研究は西下<sup>(14)</sup>の研究以外ない。そのため、主観的幸福感が高齢者と中高年者との間で差異があるかどうかについてあまり分かっていない。西下の研究結果は次のようであった。彼が分析したデータは、大都市に住む50歳から54歳の男性雇用者を調査し、10年後にパネル調査したものである。その分析結果に

よれば、年齢の高くなった10年後の方が男性の主観的幸福感は高くなっていった。高齢者の主観的幸福感に関する先行研究<sup>(11)(12)(13)</sup>によれば、年齢が低いほど主観的幸福感は高かった。このことから、中高年者は高齢者よりも主観的幸福感が高いと予想できるけれども、西下の研究結果はこの予想に反していた。

### 一文 献一

- (1) 古谷野巨「モラルに対する社会的活動の影響—活動理論と離脱理論の検証—」『社会老年学』No.17, pp.36-49, 1983
- (2) 古谷野巨「老後の幸福感の関連要因—構造方程式モデルによる全国データの解析—」『理論と方法』8(2), pp.111-125, 1993
- (3) 野辺政雄「地方都市に住む高齢女性の主観的幸福感」『理論と方法』14(1), pp.105-123, 1999
- (4) 上野千鶴子(編)『「女縁」をきたた女たち』岩波書店, 2008
- (5) 古谷野巨・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』16(2), pp. 15-123, 1995
- (6) 谷口和江・浅野仁・前田大作「身体的活動レベルの高い男性高齢者のモラル」『社会老年学』No.12, pp.47-58, 1980
- (7) 野邊政雄『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶の水書房, pp.271-289, 2006
- (8) 直井道子「都市居住高齢者の幸福感—家族・親族・友人の果たす役割—」『総合都市研究』No.39, pp.149-159, 1990.
- (9) 前田大作・野口裕二・玉野和志・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liand「高齢者の主観的幸福感の構造と要因」『社会老年学』No.11, pp.15-31, 1989
- (10) 佐藤秀紀・中島和夫「高齢者の主観的幸福感を規定する要因の検討」『社会福祉学』37(2), pp.1-15, 1996
- (11) 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一「老人の主観的幸福感とその関連要因」『社会老年学』No.29, pp.75-85, 1989
- (12) 古谷野巨「団地老人におけるモラルと社会関係—性と配偶者の有無の調節効果—」『社会老年学』No.35, pp.3-9, 1992.
- (13) 野口裕二「被保護高齢者の主観的幸福感と健康感」『社会老年学』No.32, 3-11, 1990
- (14) 西下彰俊「中高年期のモラルの現状と変化」『社会老年学』No.25, pp.30-43, 1987
- (15) 鈴木広「都市人の生活構造論序説」鈴木広著『都市化の研究』恒星社厚生閣, pp.190-215, 1986
- (16) 坂野達郎・東海林崇「高齢者のSubjective Social Well-Beingと居住地都市圏人口規模との関連に関する研究」『老年社会科学』28(3), pp.312-320, 2006
- (17) 横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野巨「老親と別居子の関係—団地に居住する女性老人の場合—」『老年社会科学』15(2), pp.119-123, 1994
- (18) 古谷野巨・柴田博・芳賀博・須山靖男「PGCモラル・スケールの構造—最近の改訂作業がもたらしたもの—」『社会老年学』No.29, pp.64-74, 1989
- (19) 福武直『日本社会の構造 第二版』東京大学出版会, 1987, pp.32-38
- (20) Antonucci, T. C., "Social support and social relationship," In R. H. Binstock and L. K. George (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences*, 3rd Edition, Academic Press, 1990, pp.205-226.
- (21) George, L. K., "Subjective well-being: Conceptual and methodological issues," *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, 2, 1981, pp.345-382.

(本稿は、平成17年度の岡山大学学長裁量経費による研究成果の一部です。面接調査に協力していただいた富地域のみなさんに感謝いたします。また、洞察力のあるレフリーのコメントで本稿の内容が大幅に改善されました。レフリーにも感謝いたします。)